

日本計画行政学会

東北支部だより No. 28

2005. 3発行

掲載内容

特 集

- ・・・(財)東北開発研究センター20周年記念シンポジウム・・・
～変革の時代における豊かさを求めて～

記念講演 「地域の時代は可能か」

赤坂憲雄氏 東北芸術工科大学 東北文化研究センター所長

お知らせ

- ・第21回理事会・総会および研究大会の開催について
- ・日本計画行政学会第28回全国大会のご案内について
- ・日本計画行政学会2005年度第10回「計画賞」について

編集後記

工藤副支部長 東北福祉大学助教授

地域の時代は可能か

東北芸術工科大学

東北文化研究センター所長 赤坂 憲雄

東北の20世紀は故郷を捨てた時代？

今、「地域」という言葉が盛んに使われていますが、この言葉はそれほど古い言葉ではありません。ついこの間までは「地方」、戦前には「郷土」という言葉が好んで使われていました。しかし「地域」という言葉には、少なくとも中央や国家の補完物であるという「地方」とは違う何か託されているように感じます。

ところで、20世紀の終わり頃から盛んに使われてきている「ふるさと」という言葉が気になっています。私の父の故郷は福島県東白川郡鮫川村大字渡瀬です。私は、子どもの頃父と一緒にここに来たことがあります。私自身は東京生まれの東京育ちですので、自分には故郷はないとずっと思ってきました。私が30歳代半ば頃、仕事のついでに父のふるさに立ち寄って見たことがあります。夕暮れ時でしたが、子どもの頃に来た当時の記憶を探りながら、渡瀬集落の中を歩いてみました。高台に上っていくと小学校があり、その手前に1本の標柱が立っていて、「旧名主赤坂家別邸跡」と書かれていました。この文字を読んだとき私は大きな衝撃を受けました。何となく心がざわざわするのです。少なくとも父につながる祖先がこの村にいたことだけは確かだということを実感したからかもしれません。

私のように東京生まれ東京育ちの人、あるいは都会暮らしの人々のほとんどは、2～3代さかのぼるとみな地方出身者です。東京のような都市は、いわば地方出身者の末裔たちがつくったところ。私の父のように都会に住むようになった人は、故郷を捨てたのかも知れないし、あるいは故郷に捨てられたのかもしれない。故郷を捨てるということは何を意味するのか。父のふるさとを訪ねたそのときから私は心の中でずっと問い続けてきました。この問いは、私だけでなく、都会に暮らすたくさんの人たちが共有しているものなのかもしれません。そしてそこに都市と村や地域をつなぐもう一つの関係、絆といったものを問いかける基盤があるのかもしれないと感じています。

文部省唱歌の中に、ふるさとをテーマにした歌がいくつかあります。その歌詞を丹念に読み込んでいくと、ある一つのことが見えてきます。歌詞のどこにも書いてはいませんが、明らかに主人公は旅の人です。故郷を離れて異境をさすらう、あるいは都会に出て暮らしている一人の男で、年齢はどうやら中年以降の人です。旅人である中年の男は、いわば故郷を捨てた、または故郷に捨てられた男たちです。秋の夕暮

れや夜、孤独に、あるいは寂しさにまみれながら、立身出世の夢が破れて、その挫折感にやるせない思いを抱きながら、ノスタルジーの対象として故郷を思って歌っているわけです。苦くて甘やかで、そして遠い幻のような故郷。文部省唱歌の中では故郷は常に過去に属しています。たくさんの日本人によって懐かしく歌われてきている文部省唱歌の中のふるさとは、ある意味では、ふるさと、地方、地域というものの原風景のようになっています。

このような詩が歌われる背景には、20世紀という時代には地方から都市への大規模な人口の移動が起こったことがあります。次男、三男は村にとどまることができずに集団就職あるいは出稼ぎで都会に出ていきました。そして村では過疎化が進み、ついには集団離村の形で消えてしまった村もあります。東北の20世紀は故郷を捨てた時代として記憶されるのかもしれませんが。

新たな帰郷の時代へ

でも、出稼ぎはもはやなくなりました。何かがいま変わってきているように思います。村から都会に人が出て行くという流れに底打ち感が窺えるとでも言えばよいのでしょうか。聞き書きをしながら村や町を歩いていると、地域づくりに取り組んでいる人たちの中には都会から農村に帰ってきた帰郷者がいます。ふるさとに帰ってきた人たちの姿がどこにでも見られます。

故郷に帰る形にはいろいろあるでしょう。Uターン、Iターン、Jターンといろいろ名づけられています。例えば山形県高島町には星寛治さんという大変すぐれた指導者がいて、有機農業を中心としてさまざまな活動を行っています。その高島町には、60人以上の若者たちが農業に夢を抱き、農業をするためにこの町に移り住み、そこで家族をつくっています。移り住んだ若者たちのほとんどは高島町出身ではなく、別の地方から来ています。これもまた故郷に帰る一つの形だろうと思います。60人という数字は少ないようにも見えますが、私は大変な数だと思っています。この人たちを受け入れた高島町は既に姿を変えつつあるだろうと思います。新たな帰郷の時代が始まるのかもしれませんが。少なくともその予感を私は感じています。

私は、今から13年前に山形に新しくできた東北芸術工科大学に赴任するとき、心に決めていることがありました。東北に行って、東北学という新しい「地の運動」を起こそうと。それはなかなかうまくいかずに試行錯誤を繰り返しましたが、ようやく数年前になって大学の中に東北文化研究センターという小さな研究所をつくることができました。そこを拠点にして私は『東北学』という雑誌をつくるなど東北学に関わるいろいろなことをやっています。私は、これも一つの帰郷のスタイルだと思っています。

昨年(2003年)4月、私は会津にある福島県立博物館の館長になりました。その話をいただいたときに、私は二つ返事でそれを引き受けていました。私は、いずれ福島

へ「帰る」と思っていたからです。会津の各地を歩いてわかったのですが、会津は、父の母方の血筋につながるところで、ある意味ではふるさとの一つとも言える土地だったのです。自分の血が会津にまでつながっている。あらためて会津の村や町を歩きながら、私はやっとなふるさとに帰ってきたのかもしれないと感じています。

地域とはだれのものか

地域はだれのものか。これは、変な問いかけかもしれません。例えば、あるテレビ番組で島根県の片山知事は、あるまちに実際にあった例として次のようなことを言っていました。

まちの背後に小さな山があり、そこが切り崩されてキャンプ場になった。自然が豊かで里山の風景が残っていたそこに自然公園と称して木を大量に伐採してキャンプ場がつけられた。これは、30年以上前の国家プロジェクトとして計画され、そこに40億円以上のお金がつぎ込まれた。けれども、その山の中は1年の半分以上が雪に閉ざされている。そんなところにキャンプ場をつくるということがどのような意味を持つのか。地元の人たちの雇用の場がつけられるわけでもないし、地域の経済には何の影響もない。地域の主体性というものが無視され、上から補助金や助成金という形のお金が降ってきて、キャンプ場が作られている。だからそのお金を全部使い切るために、切らなくてもいい木をわざわざ切って、もう一回木を植えるという無駄なことをするようになる。

こういうことはもう止めようと、極めて当たり前のことを島根県の片山知事は述べています。地域、あるいは地域主義というものがいま大きな可能性を持って表に出てきているということは否定できないだろうと思います。改めて地域とはだれのものかという問いかけが生まれてくると思います。

「定住革命」

昨年秋、私は、鹿児島の上ノ原遺跡という9500年前の縄文遺跡を訪ねました。ここは日本で最初に定住が始まった村の遺跡です。そこは、湾に臨む高台の上にあります。桜島の噴火によって村が何度も壊滅しています。それにもかかわらず人々はそこに戻ってきては村をつくり、定住の村を営むということを繰り返してきました。そこでは1万年前の昔から定住の暮らしが営まれてきたらしいのです。学者たちはそれを「定住革命」と呼んでいます。

移動の生活から定住の生活へと変化すると、ごみや排せつ物の処理が大きな問題になります。移動の生活の中ではごみや排せつ物を置き去りにしても、1年後にそこに戻って来たときには、それらはすべて消えてなくなっています。ところが定住の村が営まれるようになると、そうはいきません。死者の埋葬をどうするか、墓地をどこに営むか。定住という暮らしはそうした問題を大変切実なものにします。そして恐らく人々は、あの世とはどこにあるのか、そんなことも考え始めたはずですし、土器など

の生活の家財道具というものも生まれてきます。移動の暮らしの中では、家財道具は必要最小限のものしかありませんでしたが、定住生活では土器を初めとして永続・継続的に使うことができる多くの家財道具、いわば財産というものが発生してきます。

また、かつて移動から移動へという暮らしの中では、その集団に何らかのトラブルが起こった場合、トラブルを起こした家族同士が分かれて、別の集団に入っていくということで解決されていたと思います。ところが定住して村を営むとなると、簡単に外に出ていくことができません。その村の中で、持続可能な村というものをどのようにデザインするかということが大切な問題になってきます。1万年前の日本列島に定住という暮らしのスタイルが生まれたとき、それまでとはいろいろなものが大きく変わっただろうと思います。

多様な人に開かれた地域へ

ところが、もしかしたら私たちが今生きているこの時代は、1万年間の「定住革命」が終わりを迎えている時なのかもしれません。

例えば、日本海に浮かぶ飛島（山形県酒田市）という小さな島があります。飛島の人に「島の人口は今何人ですか」と尋ねると、「うーん、500人はいないな、400人ちょっとじゃないか」と、あいまいな答えが返ってきます。しかも、人によって人口数もまちまちです。誰も島の人口をきちんと把握していないのです。私は、この小さな島で不思議なことだなと感じましたが、冬に飛島を訪ねた時に、やっとそのわけがわかりました。私が夏に泊まった旅館は冬にはみな閉ざされていて、人がいません。彼らは夏には飛島で暮らしていますが、酒田にもう1軒家があって、冬にはそちらで暮らしているからです。また高校に通うような子どもたちは酒田に住んでいて、庄内のどこかの高校に通学していますので、おばあちゃんや母親もまた賭いのために夏でも子どもたちと一緒に酒田で暮らすようになります。つまり家族がばらばらに暮らしています。これでは「人口は？」と聞かれて、島の人たちが「よくわからない」と答えざるを得ないと思いました。

しかしこの現象は飛島だけのこととは思えません。いま村や町を歩いていると、村に家はあるけれども仕事の場は都会という人が多いのです。仕事場のある町場に住んでいて、土日だけ村の家に戻ってきて田んぼ仕事をしているという人も珍しくありません。村に生まれ、村に育ち、村で暮らすといった古典的なイメージからはかけ離れた姿がいまや当たり前になりつつあるのではないかと思います。

定住とは一体何なのでしょう。最近、観光に携わる人たちの間では、「交流人口」ということがしきりに語られています。村に定住しているわけではないけれども、旅、観光といったことを含めて村や町を訪れてくる人たちがいます。その人たちを交流人口というのですが、それに注目して、例えば100万人の交流人口は1,600人の定住人口に匹敵するというような試算が出されたりしています。

確かに定住を古典的にとらえて、その地域に生まれ、育った人がその地域の主人公であるという考え方に縛られていると、いま起こりつつある現実は見えないのかもしれない。生まれ育った人もいる、そして一度故郷を出てまた戻ってきた人もいる、あるいは生まれ育ったところは別の土地かもしれないけれども、とにかく村に帰ってきた帰郷者たちがいる。さらにそこを訪れてくる人がいる。旅人や観光客、そして滞在する人もいるし、あるいは引っ越して、転入してくる人もいる。いま地域には、そうした多様な人々に対していかに開かれていくかどうか、多様に開かれた地域のイメージというものを提示できるか否かということが問われているのかも知れません。縄文以来の1万年に及ぶ定住の時代というのがもしかしたらいま終わろうとしているのかも知れません。

いわば地域社会が定住ということを自明として、その地域に生まれ育った人々によって支えられていた時代は次第に過去のものになるようとしています。少なくとも従来の古典的な定住を中心とする考え方から脱却し、新しい開かれた村の形というものを創っていく必要があると思います。

辺境としての東北イメージをいかに超えるか

地域に暮らす新たなアイデンティティ、あるいは地域の絆といったものを新たに創造していく時代にいまはなりつつあります。だからこそ、いま「地域の語りべ」が求められています。自らの地域について、その歴史や文化や風土について自らの言葉できちんと語るができる人々のことを私は「地域の語りべ」と呼んでいます。東北から1万人の語りべが登場するとき、東北のイメージは根底から変わるに違いありません。この1万人という数字は大して根拠はありません。ただ、たくさんの語りべたちが東北の村や町から誕生して、彼らが自らの言葉で自らの地域について語り始めるときに何かが大きく変わるに違いないと思っています。そして既にそうした動きはさまざまな形で起こっています。

十数年前に私が山形の大学に赴任すると決めたとき、とりわけ関西の友人たちはとてもおもしろい反応を示しました。私がまるで島流しにでも遭遇したかのように同情してくれたのです。当時、東北にある大学に行くということは、そういうマイナスのイメージを持たれていたのです。私自身は、東北でやりたいと思うことがあったから東北の大学を選んだわけですが、ほとんどの人は2~3年もしたら東京に戻ってくるだろうと思っていたようです。私が彼らにどんなに説明をしても、納得しないだろうと感じましたから、私はただ笑ってその場をやり過ごすしかありませんでした。

私の勤務する大学の名称がもし「山形芸術工科大学」だったら、多分私は赴任してこなかっただろうと思います。「東北芸術工科大学」だったから私は来たのです。しかもいずれこの大学を母体として東北文化研究所をつくるという構想があるという話も聞かされていました。私は、それをずっと信じていましたし、つい5~6年前に「東北

文化研究センター」という形でそれも実現しました。

山形に来てからも私は、辺境としての東北イメージをいかに超えるかに一貫してこだわってきました。東北に行くと言ったら、まるで島流しにでも遭うように同情してくれたあの人たちを見返すためにも、辺境としての東北というものをいかに超えるか。「寒い、暗い、貧しい」というおしんに代表されるような東北のマイナスイメージはどこからやってきたのか。それはどうしたら払拭できるのか。これは私に課せられた課題だとも思っています。

東北の歴史・文化・風土の豊かさをきちんと語るべき時代

おしんの批判をすると、山形では「まちおこしに影響するからやめてくれ」と言われます。僕が山形に赴任してきてすぐに「さらば芭蕉」ということを言ったら、これも批判されました。東北ではどこに行っても「奥の細道」がもてはやされています。よそからやってきた偉い文学者、知識人によって語られた東北のイメージというものに決別ののろしを上げる必要があると私は思います。「芭蕉が宿泊した」ということがその地域の人々にとってどういう意味を持つのかと、もう一度問い返してほしい。他に身をゆだねるのではなく、もっとしたたかに、しなやかに利用すればよいのです。芭蕉が詩を詠んだ。その詩はすばらしいかもしれないが、そこに身をゆだねてしまっただけだと私は感じています。

確かに「寒い、暗い、貧しい」東北がかつてはありました。けれども、私がこの十数年、東北の村や町を歩いて聞き書きしてきて、そんな貧しい東北に出会ったことは一度もありません。既に東北は十分なほどに豊かになっています。三世代家族では、世代毎にテレビがあり、居間があり、そして大人の数だけ車があるような暮らしのどこが貧しいのでしょうか。でも東北の人々の心の中には貧しさの幻影がまだどこかに残されています。

いま、経済的な豊かさだけに縛られることなく、東北の歴史や文化や風土の豊かさといったものをきちんと語るべき時代に入っています。プラスのイメージを持った人や物や景観といったものを東北からどのようにしてつくり出すか。これは、だれもが当然のこのように気づいています。いまはそれを実行するときだと思えます。

多様な民族や文化が共に生きる

第5次全国総合開発計画の中で語られている東北のイメージはなかなか魅力的なものです。そこには一極一軸型の国土構造から多軸型の国土構造への転換ということが言われています。これまでは東京を中心とした太平洋のベルト地帯が突出した形で発展し、それがそのほかの地域に波及するというスタイルだったわけです。でも、これからはそれぞれの地域、東北なら東北という地域がその自然や風土や文化に根ざした形で、もっと多軸型、多極型の発展があってもいいということです。だからこそ東北では、例えば「21世紀を先導する自然共生型社会を目指して」という方向も出てくる

のです。歴史資源の活用や貴重な自然資源の保全整備等を通じた地域づくり、これも当然のことです。東北独自の情報を発信するための知的センターという言葉もありました。そこで示された向かうべき方向は、私は間違いなく正しいと思っています。しかしバブル経済の破綻とその後の混乱の中で、多軸型の国土構造への転換といったことがたちまち引っ込められてしまい、見えなくなりました。また国家経済の破綻が迫っているという状況の中で、地方と国家がある種の綱引きをやっています。

私自身は、日本文化の見方ということにかかわって、一つを中心がある、そして一つの日本があるというイメージではなく、この日本列島には幾つもの多様な地域文化が並び立っていたのではないかと考えています。幾つもの日本が存在したはずだという問題提起をしながら私は東北学という新しい「地の運動」をつくってきました。それは単に東北の問題にはとどまらず、恐らくグローバル化ということが叫ばれるこの時代の中で、最も大切なテーマになっていくと思っています。それは多様な民族や文化が共に生きるための、共存するためのモラルあるいは思想といったものをいかに創り出すかという問題です。

地域を真剣に考えることから地域の時代は始まる

いま、アメリカという巨大な帝国は彼らを唯一の絶対的な基準として世界に広がっていきつづけています。全世界を均質化していく巨大な暴力です。この中では世界が金太郎あめ化していく可能性があります。ある側面ではそれは避けがたい流れかもしれませんが、けれどもいまイラクを中心としたイスラム世界で何が起きているかということを中心に問いかけておくべきだろうと思います。資本主義的な市場原理の中では、弱者はどのように立ち向かうことができるのか。民主主義は、確かに社会のさまざまなトラブルを調停する大変適切な、あるいは今のところは唯一の思想、イデオロギーかもしれないが、そうした土壌を持たない社会にそれが落下傘のようにおろされるとき、何が起ころのか。このことを真剣に考えておく必要があります。

イスラムの世界で起きているさまざまな血なまぐさい出来事の中に、一神教の問題が見え隠れしています。世界をつくった「神」への信仰がブッシュのアメリカにもまたイスラムの世界にもあつて、それが激突しています。しかし私たち日本人の中にはそうした唯一絶対神に対する信仰といったものはあまりありません。むしろ一木一草にも、名もなき小さな神が宿っている。そういうアニミズム的な感覚の方が私たちにむしろ親しみやすいのです。石ころの中に宿っている神は、我々に人を殺せと命令することは絶対にありません。日本人に見られる神々への信仰がこの時代の中で何を主張することができるのか。甚だ心もとないことではありますが、もしかしたら全てのものに神々が宿るといった宗教感覚がとても大切なことなのかもしれません。いずれにしても、グローバル化の時代であるがゆえに、自分とは何か、自らが暮らしている地域とは何なのかについて真剣に考える必要があります。そういう問いかけの上に

地域の時代というものが始まるのだらうと思っています。

多様な「地域の記憶」を掘り起こす

最近、私の中では「東北の記憶」ということが大切なテーマになりつつあります。東北の大地に埋もれ、刻まれている記憶。おそらく私が東北学という「地の運動」の中で掘り起こそうとしてきたものがそれだと思っています。個性的な顔を持った地域をいかにデザインし、演出するか。現場からの声に真剣に耳を傾けたいと私は思います。あるいは今そこに生きている人々の姿に目を凝らしてみたい。地域にはたくさんの声なき記憶が埋もれています。その土地の記憶を一つ一つ掘り起こしていく。それがやがて未来を豊かに彩る地域資源になっていくに違いありません。

土地の記憶を一つ一つ掘り起こしながら東北を歩いていて感じたのは、東北は一つではないということです。幾つもの多様な東北があるのです。その幾つもの東北を掘り起こす。そこから新しい東北イメージが、東北の歴史観、文化・風土のイメージが立ち上がってくるのではないかと思います。

辺境としての東北イメージをいかに超えるか。「みちのく、道の尽きる、そのさらに奥に広がっている文化果つる世界」という辺境イメージをどのように超えていくことができるのか。これについてここで具体的に触れる余裕はありませんが、地域に埋もれた東北の記憶、そしてそこに孕んでいる多様性といったものが東北の辺境イメージを乗り越え、将来の東北に向けての大きな糧となり、財産になるはずです。

あるがままを肯定する

この十数年、私は東北の村や町でおじいちゃん、おばあちゃんの人生や生業を聞き書きしてきました。炭焼きをずっとしていたおじいちゃんの話聞いていたときに、「ああ、これが私の父の人生なのかもしれない。」そんなことを感じたことがあります。東北の記憶に耳を澄ますことは、私の極めて個人的な体験としては、ついに聞くことができなかつた自分の父親の人生を追体験して、それを肯定したいという欲望から出てくることなのかも知れません。父は、福島県鮫川村で生まれ、若いときに東京に出て、そこで炭を扱う燃料商をやっていました。そしてある時期に福島に戻って、山を買って炭を焼かせる山師をやりましたが、その事業に失敗してまた東京に戻っています。わずかに知っている父親の人生というものを私は今までどこかで恥ずかしいと感じていました。今にして思えば、私が東北にやってきた動機が一番深いところに、父の人生を何とかして肯定したいということがあったのかも知れません。

私の聞き書きを読んでもくれた読者の方から、東北に生きる誇りを持てるようになったという感想をもらうことがあります。あるいは私の講義を聞いていた女子学生の一人は、私が訪ねた村の隣村で育った人でしたが、そのレポートの片隅に「先生の聞き書きを読みながら、涙があふれてとまらなかつた」と書いてくれたこともあります。これらの感想は私にはとてもよくわかるのです。私が聞き書きしていることは、どこ

にでもあるありふれた小さな人生に過ぎないかも知れません。でも、それでいいのです。そこに生きていた、その姿のままでもいいのです。それは、あるがままを肯定することなのではないでしょうか。自分を肯定する、そこから新しい出発ができるのかもしれないと、私自身は感じてきました。私のそのメッセージは読者の中のある人々には届いていると思っています。

自らを語る言葉を獲得したとき、東北は変わる

東北が自らを語る言葉を獲得したとき、東北は変わっていくでしょう。東北には豊かな自然の風土や文化があり、歴史があります。しばしば誤解されているのですが、例えば東北の森の8割から9割は二次林です。原生林ではありません。二次林というのは、人間が長年かかわってつくってきた森ということです。東北の風景を見て、「大自然が豊かに残っていますね、原始的な自然が残っていますね」とたたえてくれる人たちがいますが、その人たちが前にしている風景は、東北に暮らしてきた人々が少なくとも1万年の歳月をかけてつくってきた自然であり風景であるということです。つまりそれも東北の文化の一つのあらわれだということです。いまはそういうとらえ返しがさまざまな形で必要とされている時代だらうと思います。

「地域資源」というキーワードがこの後のシンポジウムでも多分出てくるだらうと思います。例えば会津でいま、昔からつくられてきた野菜、伝統野菜を復活させようという小さな動きが始まっています。伝統野菜とは、昔からその地域だけでつくられてきた野菜です。そうしたものが新しい時代の中で新しい地域ブランドの核になっていく可能性は大きいだらうと思います。いわば、伝統というものが後ろ向きではなく、前向きに再評価される時代がそこまでやってきているのです。それはさまざまなレベルで、さまざまなスタイルで語られているし、既実践されていることでもあります。

私たちのこの時代が求めているのは、幾つもの日本、縄文時代以来の1万年の日本なのかも知れません。その1万年という時間の深さと南北2000キロ以上に及ぶ空間の広がりの中で、今まで語られたことのない日本、もう一つの日本のイメージというものが必要とされているのだらうと思います。そのとき東北は、マイナスのイメージを自ら一つ一つ払拭し、壊しながら、自らの歴史や文化や風土というものを1万年の時間の中で再発見していく必要があります。そのとき初めてそれぞれの地域の文化は新しい時代をつくる糧として地域資源として新たな命を吹き込まれて、いまここよみがえってくるのかも知れません。

「なんじの足元を深く掘れ、そこに泉あり」

地域学というものがさまざまな場面で語られています。あるいは「地元学」という言葉を使う人たちもいます。地域の再認識、しかもそれは定住を絶対視することなく、さまざまな人たちが行き交い集う、そういう開かれた場としてデザインされていく必

要があるでしょう。私は「東北の記憶」ということにしばらくはこだわりたいと思っています。これから10年ほどの歳月をかけて、1万人の地域の語りべを育てることを目指す。そしてひっそりと地域に埋もれている家の記憶、村の記憶、あるいはもっと小さな「私の記憶」といったものを呼び覚まし、そうした記憶の群れが歴史の語りべとなる。そんなことを私は夢に描いています。

「地域の時代は可能か。」この問いの向こうに私たちは既に足を大きく踏み出しているのだと思います。70年も前に沖縄の地で沖縄学という地域学を独力でつくろうとした伊波普猷という人がいました。その大学者が座右の銘にしていた言葉があります。

「なんじの足元を深く掘れ、そこに泉あり」

地域をよりどころとして豊かに生きることを願う人たちに対して、この言葉は贈り物のような、そんな言葉だと思えます。この言葉に励まされながら私自身もさらに東北学という「地の運動」をさまざまな形で展開していきたいと思っています。

どうもありがとうございました。

(小見出しは編集者による)

お知らせ(その1)

日本計画行政学会東北支部
第21回理事会・総会の開催について

標記について、下記により開催いたしますので、会員皆様のご出席をお願い致します。

別途、ご案内を送付致します。

○開催日時 平成17年5月24日(火) 11:30~(予定)

○開催場所 仙台市戦災復興記念館 4階第1会議室
仙台市青葉区大町二丁目12-1 TEL 022-263-6931

第21回研究大会のご案内

開催日時 平成17年5月24日(火) 13:30~(予定)

開催場所 仙台市戦災復興記念館 5階会議室

シンポジウム 「環境共生時代を展望する」

基調講演

講師 原科 幸彦 氏 東京工業大学大学院教授

パネルディスカッション

共催 日本計画行政学会東北支部

(財)東北開発研究センター

多数の皆様のご来場をお待ちしております。

お知らせ(その2)

日本計画行政学会第28回全国大会の開催について

開催要領(抜粋、プログラムは変更があり得ます)

1. 開催日時 平成17年9月9日(金)～11日(日)

2. 開催場所

名古屋産業大学(愛知県尾張旭市新居3255-5)

日本国際博覧会(愛・地球博)EXPOホール(名古屋東部丘陵)

3. 大会テーマ 環境共生時代の計画行政

4. 大会役員

大会会長 伊藤達雄(名古屋産業大学学長)

組織委員長 和泉 潤(日本計画行政学会中部支部長)

プログラム委員長 渡辺悌爾(日本計画行政学会中部支部副支部長)

運営委員長 伊藤雅一(日本計画行政学会中部支部幹事)

事務局長 若尾晃弘(日本計画行政学会中部支部事務局長)

5. プログラム

第一日目 9月 9日 研究発表会等:名古屋産業大学

第二日目 9月10日 研究発表会等:名古屋産業大学

第三日目 9月11日 公開シンポジウム:EXPOホール

9:30～ 開会挨拶

9:35～ 計画賞受賞作品紹介

9:40～ 計画賞最優秀賞報告

10:00～ パネルディスカッション「環境共生時代の計画行政」

第28回全国大会問合せ先

日本計画行政学会中部支部事務局

〒460-0008 愛知県名古屋市中区栄2-10-19 会議所ビル10F

社団法人 中部開発センター内

TEL 052-221-6421 FAX 052-231-2370

E-mail chubu@crec.jp

お知らせ(その3)

日本計画行政学会2005年度

第10回「計画賞」の募集について

標記について、下記、応募要領により多数の皆様の応募をお願いします。

応募要領

主催 日本計画行政学会

共催 UNU-UNEP Initiative on Innovative Communities

後援 全国知事会、全国市長会、全国町村会、日本商工会議所

(財)地域活性化センター (社)日本経済団体連合会、日本放送協会

日本経済新聞社、(財)地球環境財団

(共催、後援は現在交渉中)

スケジュール

2005年4月 1日(金) 応募開始

6月 3日(金) 応募用紙請求締め切り

6月17日(金) 応募書類(計画賞)受付締め切り

6月17日(金) 予備審査

～7月31日(日)

8月 1日前後 予備選考通過計画公表

8月12日(金) 最終審査会(公開プレゼンテーションを含む)

会場:東京工業大学

9月11日(日) 受賞記念発表会(第28回全国大会にて)

会場:2005愛・地球博会場(愛知県)

対象とする計画

- (1) 計画主体は公共セクターであるか民間セクターであるかを問わず、社会的意義が大きく公共性の高い計画を対象とします。公共団体の計画のみではなく、NGO等民間団体の計画も対象とします。
- (2) 計画の主題となる分野は特定しません。例えば、高齢化、地球環境と調和した発展、国際化への対応等、多様です。

応募者の資格

- (1) 学会員か、非学会員かは問いません。

- (2) 応募対象の計画に貢献した個人、チームやグループ(部、係、研究会、プロジェクトチーム等)自治体等の団体(民間の団体、企業を含む)のいずれかに該当し、日本計画行政学会正会員の推薦を受けた者とする。但し、自治体等の公共団体が応募する場合、学会員が応募する場合および応募者の中に正会員がいる場合には、他の正会員の推薦を受ける必要はない。

審査方法

- (1) 第一次審査 学会員約50名からなる予備審査員が、前回と同じ方式により書類審査を行なう。
幹事会が、審査結果を基に、10件程度の審査通過案を作成し、常務理事会で決定。
- (2) 公開プレゼンテーション+学会員による投票
第一次通過者による公開プレゼンテーションを行い、当日参加の学会員により投票を行なう。
- (3) 最終審査
続いて、同会場にて、最終審査員による最終審査を開催する。投票結果を加味して、賞を決定する。

賞

最優秀賞 1点 優秀賞 若干 他を予定。

受賞記念発表会

今年度より、最優秀賞受賞者を学会全国大会にお招きし受賞記念発表会を執り行ないます。

発表者一名分の交通費は学会が負担させていただきます。

日時：平成17年9月11日(日)(第28回計画行政学会全国大会にて)

会場：2005愛・地球博会場(愛知県)

応募方法

- (1) 応募のお問い合わせは、本部計画賞担当者または学会各支部を通じて行なってください。
- (2) または、ホームページから直接登録も応募できます。
<http://www.soc.titech.ac.jp/~sakano/japa/>

連絡先

本部計画賞事務局

東京工業大学 坂野達郎 Tel:03-5734-3820

Fax:03-5734-3616

E-mail japaprize@soc.titech.ac.jp 担当：堂免

法政大学 黒川和美 Tel/Fax 03-3715-6008 担当：吉岡

東北支部事務局

東北支部推薦人 尚絅学院大学 油川洋 Tel:022-383-3411 (研究室直通)
Fax:022-383-3498

東北支部事務局 (財)東北開発研究センター 総務部 関根斉

Tel:022-222-3394 Fax:022-222-3395

E-Mail sekine@tohoku-drc.or.jp

詳しくは、本部より会員各位にご案内がありますのでご覧下さい。

編集後記

昨年日本の夏は猛暑に見舞われ、全国各地で最高気温や真夏日が観測記録を更新する一方、台風も10個という上陸新記録となり、豪雨の被害も例年になく大きかった。アメリカでは、8月以降の6週間で4度のハリケーンに見舞われたが、これも観測史上初めての記録であるという。20世紀末から世界の気象変化が激しくなっているが、専門家は地球温暖化との関連を指摘している。

20世紀中の世界全体の気温上昇は約0.7℃であったが、この100年間の気温上昇は過去1000年のどの世紀にも見られないものであった。20世紀中の100年で日本の気温は約1℃（東京では2.9℃）上昇しているが、特に1980年代後半からの気温上昇が著しい。世界各地で異常気象が頻発しているのも、地球温暖化が「気候系」を変動させている兆候と考えるべきであろう。IPCCやFAOといった国際機関は、気候変動が地球生態系を狂わせ、人体や農業などに悪影響が及ぶことを懸念している。

私は10年ほど前に書いた論文で、世界人口の増加と経済のグローバル化が続けば、資源面、環境面で人類は大きな壁に直面すると予測したことがある。国連の人口統計によれば、世界人口は1800年には10億、1925年には20億であったが、1960年では30億、2005年には65億と急増している（2050年の予測人口は91億）。1960年代の日本は欧米へのキャッチ・アップを目指して成功したが、大量生産と大量消費は大量廃棄につながり、日本列島で公害問題が多発した。13億の中国と10億のインドがアメリカや日本の生活水準を追求すれば、地球は資源面、環境面で遠からず破綻することになる。

京都議定書やイラク戦争を巡り超大国アメリカの単独行動主義が批判されているが、世界のCO₂の4分1強を排出するアメリカが議定国に加わらないとすれば、温暖化対策をグローバルに検討する意味はなくなってしまう。一方では、原油市場が“第3次石油危機”的様相を呈しているが、アメリカが中東に過剰介入した失政を短期要因とすれば、中国やインドの経済成長に伴う潜在需要が長期要因として考えられよう。

一寸した先見性があれば、理解できることであるが、21世紀の人間社会が安定を保つためには、政治学的には人類が民族や宗教を超えて「地球市民」として共生すること、生態学的にはヒトとしての人類が環境や他の生物と「地球住民」として共生する道を探る以外にない。「愛・地球博」はそういったコンセプトで開催されたものであろうが、日本計画行政学会でも愛知万博と連動して「環境共生時代の計画行政」というテーマで全国大会を開く運びとなった。

その先駆けとしての意味合いもかねて、東北支部における研究大会では、環境アセス分野でのリーダーである原科幸彦教授（東京工業大学大学院）に基調講演を御願ひして、環境共生時代を展望するシンポジウムを開く予定である。学会事務局としては、多数の支部メンバーにシンポジウムへの出席を御願ひすると共に、愛知万博を見学がてら全国大会への参加を要望する次第である。

工藤 啓

日本計画行政学会東北支部

「支部だより」 編集責任者 工藤 啓

事務局 山川 富士男

関根 斉

〒980-0804 仙台市青葉区大町二丁目15-31

財団法人 東北開発研究センター気付

TEL 022-222-3394

FAX 022-222-3395